

Title	『徒然草』第十八段考：許由と孫農の故事をめぐって
Author(s)	謝, 立群
Citation	詞林. 2002, 32, p. 24-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67490
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『徒然草』第十八段考

— 許由と孫晨の故事をめぐって —

謝 立群

はじめに

『徒然草』第十八段は、物にとらわれない簡素な生活を説く章段で、中国の清貧な賢人である許由と孫晨の故事が挙げられている。本稿で注目したいのは、許由と孫晨を対にして記した例が『徒然草』以外に見当たらないという点である。¹⁾兼好がどのような発想や意図によって二人の故事を一段にまとめたのかについて考察することは、兼好の問題意識を知り、『徒然草』の執筆動機を理解する上で重要なことだと思われる。

第十八段の発想について考える際に、最も重要な点は、『和漢朗詠集』所収橘直幹の詩句や『蒙求』に見られる許由と顔回の「瓢」にまつわる話からの影響である。以下、このことについて検討する。また、許由と孫晨の故事が『徒然草』に取り入れられる際、兼好のどのような意図が込められたのか、さらに、それが日本中世のどのような思想的背景に支え

られたものなのか、といった点についても考察を加えたい。

一 『和漢朗詠集』所収橘直幹の詩句との関連

『徒然草』第十八段の発想には、『和漢朗詠集』所収橘直幹の詩句が、一つの契機を与えたのではないかと考えている。まず第十八段を掲げる。

人は、をのれをつまやかにし、おごりを退けて、財持たず、世をむさばらざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるはまれなり。

もろこしに許由といひける人の、更に身に從へる貯へもなく、水をも、手して捧げて飲みけるを見て、なりひさこといふ物を、人の得させたりければ、ある時、木の枝に懸けたりけるが、風に吹かれて鳴りけるを、「かしかまし」と捨てつ、又手にむすびてぞ、水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。

孫晨は、冬の月に袂なくて、藁一束ありけるを、夕に

はこれに臥し、朝には収めけり。

もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、記しとめて世にも伝へけめ、これらの人は語り伝ふべからず。

橘直幹の詩句は次の通りである。

瓢箪屢空 草滋顔淵之巷

藜藿深鎖 雨湿原憲之枢

（「和漢朗詠集」巻下、草、四三七・日本古典文学大系）
この詩句は「本朝文粹」巻六にある橘直幹「請被_レ特蒙_二天恩_一兼_レ任民部大輔闕_上状」の中の句である。新潮日本古典集成の頭注によると、「時には瓢箪に入るばかりの飲食にも事欠くことすらあつた顔淵のあばら屋は、草がぼうぼうと生い茂り、原憲の家はあかざの荒れるに任せて、雨がその荒屋の戸口を湿らすほどだ」という意である。橘直幹は自分の生活を孔子の弟子である顔回と原憲の清貧な暮らしぶりにたとえて任官を願つたのだが、この詩句は中世の草庵描写にしばしば引用され、「平家物語」灌頂巻「大原御幸」には、建礼門院の庵室の荒れ果てたさまが「軒には蔦椏はひかり、信夫まじりの忘草、瓢箪しばくむなし、草顔淵が巷にしげし。藜でうふかくさせり、雨原憲が枢をうるほすともいつべし。」（日本古典文学大系）と描写されているのが最もよく知られている。

さて、第十八段に描かれている許由と孫晨の故事は、「蒙

求」には「許由一瓢」「孫晨藁席」の標題で掲載されている。一方、橘直幹の詩句が制作されるについては、「蒙求」の「顔回瓢箪」「原憲桑枢」が主要な典拠になつたと指摘されている。兼好は橘直幹の詩句に詠まれた顔回、原憲を念頭に置き、許由と孫晨を並べて記したのではないかと考えている。以下、その関連性について検討したい。

まず、「蒙求」に見られる「許由一瓢」「顔回瓢箪」の故事は、いずれも「瓢」にまつわるものである。後にも述べるように、許由と顔回は、いずれも「瓢」と結び付けて取り上げられることが多く、また、物にこだわらない生き方が共通することから、二人の話が並べて挙げられたり、或いは混同されることが多い。次に、「蒙求」では、「孫晨藁席」は四〇三番目であり、「原憲桑枢」は四〇四番目であり、並んで掲載されている。周知のように「蒙求」は、二字の人名と二字の事蹟との四字句で一つの話を構成し、さらに他の四字句とが対句の形で組み合わされている。したがって、「蒙求」では孫晨と原憲はもともと対句の形で作られていることが分かるだろう。こうして、兼好は、橘直幹の詩句を念頭に置きながら、顔回を許由、原憲を孫晨にと置き換えて、新たに一つの対を作つたと思うのである。

ただし、第十八段と橘直幹の詩句とは、対のあり方には相違が見られる。橘直幹の詩句では、僅かな食事に満足した顔回と、あばら家にあつて志を変えなかつた原憲との、清貧

に甘んじるといふ同じ趣向の話が詠じられている。一方、第十八段では、木の枝に掛けた瓢が風に鳴るので、うるさがって捨てた許由の話に対して、孫晨が冬の衾がなく、代わりに一束の藁で、夜はそれに寝て、朝になると片付けたという話が描かれている。第十八段では、一個の瓢を捨てた許由と、一束の藁を用いた孫晨との、物の用捨に对照の態度が見られる。「徒然草」のこの発想は、「蒙求」の「許由一瓢」の故事と「顔回瓢簞」の故事との対比から得たものだと考えられる。これについて、次節で検討してみることにしよう。

二 「瓢」の用捨

「蒙求」の「許由一瓢」と「顔回瓢簞」は次のように描かれている。

逸士伝、許由隱箕山、無益器。以手捧水飲之。人遣一瓢、得以操飲。飲訖掛於木上、風吹漑漑有聲。由以為煩、遂去之。

論語曰、一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。

(新釈漢文大系)

これら二つの故事における相違点は、両者とも「瓢」という語は出るものの、許由の故事には「瓢」のみが用いられ、顔回の記事には「簞」も用いられている点である。なお、「瓢」は、飲み物を入れるひさごという意味であり、「簞」

は、食物を入れるわりごという意味である。

「顔回瓢簞」の標題に見られる「瓢簞」の語は、「論語」雍也篇の「一簞食一瓢飲」に由来する。元来、この語は「瓢」と「簞」との両方の意味を持つが、しかし、日本においてその意味は変化した。早川光三郎氏の論考によると、「瓢簞」の語は、橘直幹の詩句に詠まれて『和漢朗詠集』に収められることよって、一般に知られるようになった。橘直幹の詩句に「瓢簞屢空」とあるように、「瓢簞」の語に「空し」が接続し、それが「瓢」の空洞との連想から、「瓢」の字の意味に比重がかかり、「簞」の字の意味は忘れられ、「瓢簞」は「瓢」のみの意に転化したという。

このことを、『和漢朗詠集』注釈書の橘直幹の詩句に対する注釈で確認してみたい。

愁歎詞。直幹作。蒙求注云、顔淵、名回、賢人。孔子弟子也。家貧不_レ過_二一_レ簞食一_レ瓢飲_一。説云、瓢者、生瓢也。顔回拈_二生瓢_一而為_レ器。屢空者、無_レ飲食_一底空也。

(東京大学本『和漢朗詠集私注』一和漢朗詠集古注釈集成)第一卷、大学堂書店)

・瓢簞屢空、又、生瓢トモ云ヘリ。ナリヒサク也。孔子ノ弟子ニ、顔淵ト云者、才惠ニ勝テ、三千ノ貫首タリト云ヘトモ、家貧ニシテ、朝夕ノ食ナシ。世路ノ器モナケレハ、或人、柄ノ長キナリヒサゴヲ与ヘテ、水ノ器ニセヨト云ケレハ、此一ツヲ取テ、何ニカセントテ、抛テ置ケ

レハ、其器ノ空シテ、只、春ノ草ノ扉ヲ埋テ、幽ナル栖イ、哀ニ見ヘケル。委蒙求ノ注ニアリ。

(書陵部本「朗詠抄」・「和漢朗詠集古注釈集成」第二卷下)

これらの注釈のうち、「瓢簞」の語に対する注は、「瓢」の部分だけが重視されている。したがって、この時点では、「瓢簞」は、既に「瓢」のみの意味に転化していることが分かるだろう。そのため、日本において、顔回は「瓢」という語と一般に結びつけられるようになったと考へるのである。

中世の書物において、許由と顔回が混同された例がよく見られる。例えば、「宝物集」巻三には、

後漢書には、「孫晨まつしくして、冬の日藁をしく」など申て侍るめる。これならず、顔淵、瓢つぶりをかけ、原憲藜をくらふなど申たれば、今生の果報は、前世の檀波羅蜜によるなり。

(新日本古典文学大系)

とあるが、傍線部分について、早川光三郎氏は、これは顔回、許由の故事における話や言葉の混同から来た混乱現象だと指摘している。「瓢つぶりをかけ」は、「許由一瓢」の「掛_二於木上_一」に由来するが、このように日本では、「掛_二於木上_一」に基づく表現で許由を描くことが多い。ちなみに、「宝物集」のこの文章には、孫晨、顔回、原憲が一緒に登場している。許由と顔回が並んで挙げられることも多い。「徒然草」との関係で特に注目したいのは、室町時代初期に成立した説話集「三国伝記」巻一第二十五話「抜_レ髪男事」である。男が

二人の妻に言われるまま自分の髪を全部抜いてしまふ話であるが、その男は次のように描写されている。

夫、是モイナミ難ク覺テ又白髪ヲ抜捨テ白粉ヲ面ニヌリ青黛ヲ眉ニ画ケリ。去程ニ黒キ髪ハ先キニ抜、白髪ハ今抜捨テ見_ルニヲカシカリケリ。小婦嫌テ曰、「世ノ中ニカカル事ハ未_レ見。何ノ姿ゾヤ。カカラン者ヲバ如何カ男ニモ可_レ憑」ト曰テ追出ケレバ、無_レ為方_ニ頭ヲ裏顔ヲ指隠テ老婦ガ許ニ行ヌ。婦ガ曰、「何_トテ頭ヲバ裏_ニ顔ヲバ隠ス_ゾ」トテ引ノケ見レバ、裸_カ頭_彩、色_ヲ顔、許由は捨テ顔淵は用_シ器_ニ書タルニ相似タリ。老婦驚テ、「穴見苦シ、畏シヤ」トテ逃去_リヌ。

(中世の文学)

この話では、はげ頭に化粧をした男の顔を、直接瓢簞とは言わずに、許由は捨て顔回は用いた器という言葉で表現している。このような許由と顔回から「瓢」の語を連想させるといふ、作者乃至享受者の共通理解があつたことは注目され、そしてなにより、「三国伝記」の作者が、許由と顔回の「瓢」に対する態度を、「捨」と「用」に区別して描いた点は注意する必要があるだろう。

顔回と許由はいずれも瓢と関連がある。しかし、瓢の用捨は対照的である。兼好はこの対照の妙に着目し、第十八段では、許由と孫晨とを対照的に描いたと考へられる。孫晨の伝記は不明であるが、「蒙求」「孫晨藁席」に、「家貧織席為_レ業。明_ニ詩書_一。為_ニ京兆功曹_一」とあるように、家は貧し

かつたが、「詩經」と「書經」に明るく、後に京兆の功曹まで昇進したと記されている。この記述から、一束の藁の話は、孫晨が貧しい書生であった頃のことだと推察できる。厳しい冬の到来の中、一束の藁に耐えて学問をしていた孫晨の姿は、顔回像と重なるものであり、第十八段では孫晨が顔回の代役として機能していたと考えるのである。

三 日本における「許由一瓢」の受容

では、兼好は、許由と孫晨を描くことによって、何を主張したかったのであるう。次に、許由の故事の日本における受容について考察し、さらにそれが兼好の許由像の形成にどのような影響を与えたかを明らかにしたい。

許由と言えば、まず、「洗耳」の故事を想起する。堯帝が許由に禪讓の意を打ち明けると、許由は箕山に遁れ、さらに堯帝が九州の長にしようとして召すと、許由は汚らわしいことを聞いたと言つて潁水の流れて耳を洗つたという。世俗的な権力、名声を求めない許由の潔癖さは、中国の隱逸の理想を示すものであつて、許由は長く隱逸の規範とされた。しかし、中国の詩文には、「許由一瓢」の精神を讚美したものはあまり見られない。何故かと言えば、中国の隱逸は士人が官を離脱することであり、隱逸者にとつて、清貧な生活を守り通すことが大切であり、唯一の所持品である「瓢」までも捨てて

しまつた許由の極端な姿勢より、顔回の清貧に甘んじる生き方が受け入れられやすかつたためと考えられる。しかし、寒山詩のような「許由一瓢」を讚美する例外的なものもある。

独臥重巖下

独り重巖の下に臥す

蒸雲昼不消

蒸雲昼も消えず

室中雖踰暖

室中は踰暖たりと雖ども

心裏絶喧囂

心裏は喧囂を絶す

夢去遊金闕

夢は去つて金闕に遊び

魂帰度石橋

魂は帰つて石橋を渡る

拋除閑我者

拋除す我を閑がすもの

歴々樹間瓢

歴歴たる樹間の瓢を

(新修中国詩人選集)

許由が樹間の瓢をさえ捨て去つたように、自分はすべてを放擲したと述べている。寒山詩に仏教的色彩が濃いことは確かであり、すべてを放擲したことによつて得た絶対的な靜寂が、仏道修行者が求めた境地である点に注意する必要がある。

「許由一瓢」の故事は「蒙求」の伝来によつて日本に伝わつた。日本でこの故事を掲載したもつとも古い例は『唐物語』である。第十七話には、「洗耳」の故事と「一瓢」の故事が並んで引かれている。

堯と申みかど許由にくらみをゆづらんとて。三たびまでめしけるを。きたなき事をき、つといひて。潁水といふ

河にみ、をあらひけるも。いかなる事にかとおかしきやうに聞ゆ。(中略)又水くむひさごを一たけのあみどにうちかけたりけるが。風のふくたびに。とにあたりつ、なりけるをさへうるさしといひて。たちまちにわりすて、けり。これらをきくにも。げにともおぼえぬに。

(統群書類従第十八輯上)

傍線で示したように、「唐物語」の作者は、「洗耳」の故事に対しては、「いかなる事にかとおかしきやうに聞ゆ」と、奇妙なことだと評し、「許由一瓢」の故事に対しても、「げにとおぼえぬに」と、本当の事とも思えないと評する。小林保治氏「唐物語全釈」(笠間書院、一九九八年)は、「本話のような、あまりにも潔癖すぎるといふような非難は特異な例である」と指摘している。それは、やはり「許由一瓢」の故事に見られる、許由の極端な姿勢が受け入れられにくかったことを示しているのであろう。

「許由一瓢」の故事は「蒙求和歌」第八、閑居部にも掲載されている。

(前略)許由箕中ノ松下ノイツミノ水ヲ手ニクミテノミケリ。人コレヲアハレミテ。ナリヒサコヲオクリケリ。許由水ヲクミテノミヲハリテ。コスエニカケテケリ。ヒサコ風ノフクタヒニ歴タトシテナリケリ。許由ナルコエヲワツラハシク思テ。ウチワリテステ、ケリ。

シミツクム跡タウトモ松陰ヤ風ニミタル、音ハヨ

シナシ

(とふ人の風のつてまでよしなきは清水くみける松の下

蔭) (統群書類従第十五輯上)

「許由一瓢」を、例えば「東関紀行」では、簡素生活の実例として捉えているが、「蒙求和歌」は明らかに許由の閑静の境地を褒め称えたものである。

中世においては、許由の故事を仏教思想と結びつけて理解しようとする傾向が顕著である。「太平記」巻三十二「直冬与三吉野殿」合体事付天竺震旦物語事」の例を見てみよう。

サテモ何クニカ賢人アリト、隠遁ノ者マデモ尋求メ給ヒケル処ニ、箕山ト云所ニ許由ト申ケル賢人、世ヲ捨光ヲ韜テ、只苔深ク松瘦タル岩ノ上ニ一瓢ヲ懸テ、漑々タル風ノ音ニ人間迷情ノ夢ヲ醒シテゾ居タリケル。

(日本古典文学大系)

また、広島大学本「和漢朗詠集仮名注」は、「和漢朗詠集」(巻下、松、四二二)にある白居易の詩句「但有双松当三砌下」更無一事到心中」を解釈する時、許由の故事を引用し、次のような理解を示している。

下ノ句ハ、昔シ、許由、云ケル人、閑居シテアリケルニ、水ヲノムヘキ器ノ無シテ、手ニ汲テ吞ケレハ、或人、フクベヤ一ツ与フ。許由、此フクベニテ水ヲ吞テハ、松ニカケテ置キ玉イシカ、能々思ヘハ、此モ我カ物ト思ヘハ、執心有リトテ、捨テニキ。如此、今、白居易モ、只松ノ砌ニサハカシキ外ニ、更ニ

我^カ心^ノ中^ニハ、一物^トシテモ、造作^ノ義ナシ。何^ニテモ、求^フ思^フ意^ナシト云ハントテ、一事^ノ心中^ニ等^ト云ヘリ。

〔和漢朗詠集古注釈集成〕第二卷下

傍線で示したように、「瓢」が執着を起す心の問題として捉えられており、許由は現世への執着を絶つために瓢を捨てたと説明されている。この理解は、第十八段における許由の故事の意味を考えるうえで、参考になるものである。「許由一瓢」の故事は、「蒙求」の原拠のままであった。しかし、中世的思想を背景に考える時、中世的発想や感覚にひきつけられ、新たな意味が付与された。この故事は、このような背景をもって「徒然草」に取り入れられたのであろう。

四 隠遁者としての生き方

第十八段には、無一物となる許由の生き方と、清貧な生活に満足する孫農の生き方との、二つの生き方が示されたと考えられる。

前節において述べたように、第十八段では、孫農が顔回の代役として機能している。一束の藁に耐えた孫農の姿が、顔回像と重なるものであり、また原憲にも通じると考えるのである。では、顔回の生き方はどのようなものであろうか。

前掲「蒙求」「顔回瓢簞」の「一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪へず。回や其の楽しみを改めず。賢

なる哉回や」は、孔子が顔回を賞賛する言葉である。その典拠である「論語」雍也篇の当該箇所に対し、朱子「論語集注」は次のように注釈する。

顔子之貧如^レ此。而^レ处^レ之泰然。不^レ以^レ害^レ其^レ樂^一。故夫子再言^レ賢哉回也^一以^レ深歎^レ美^レ之^一。

〔四書集註〕

また、朱子は程子の次の言葉も引用している。

程子曰、顔子之樂。非^レ樂^一簞瓢陋巷^一也。不^レ以^レ貧^一累^レ其^レ心。而改^レ其^レ所^レ樂^一也。故夫子称^レ其^レ賢^一。又曰。瓢簞陋巷非^レ可^レ樂^一。蓋自有^レ其^レ樂^一爾。其^レ字当^レ玩味^一。自有^レ深意^一。

〔四書集註〕

つまり、顔回の生き方に、不遇の境遇ながら貧窮を貧窮とせず、超然として生き抜く「安^レ貧^一樂^レ道^一（貧に安んじて道を樂しむ）」の思想が込められている。「孟子」「尽心章句上」には、「古之人、得^レ志^一澤加^レ於^レ民^一、不^レ得^レ志^一、修^レ身^一見^レ於^レ世^一。窮則独善^レ其身^一、達則兼善^レ天下^一。」（新釈漢文大系）とあるように、儒家思想は、士人は乱世において志を得ないときは、退いて自らの身の安全の確保と自己修養に努めるべきことを説いている。孔子は顔回を「賢なるかな」と賞賛することによって、仕官していない時に士人の取るべき生活態度を勧め名を得るためには、仕官を求めろしか道はなかつた。隠逸生活に入ることは、俸禄を失うことであり、その結果として、多かれ少なかれ生活の貧困を招くことは必然であった。した

がって、顔回の生き方は、中国の隱逸者たちに広く受け入れられ、理想的な生活態度となった。

先ほど述べたように、日本では顔回と原憲の暮らしぶりを詠じた橘直幹の詩句は、中世の遁世者の草庵描写にしばしば引用されていた。また、自ら顔回と原憲を目指す遁世者もいた。例えば、『方丈記』（長享本）には、次のような一節がある。

方丈の居所たのしき事かくのごとし。かやうの事又人にむかひていふにはあらず。只身にとりて心のひくかたなれば、原憲が百綴、顔子が一瓢の跡を思ふばかりなり。もし人これをうたがはしく思はゞ、魚と鳥との情を見よ。魚は水にあかず、鳥は林にあかず。魚にあらざれば、水のすみよきをしらず、鳥にあらざれば、林のねがはしきをしらず。

（新日本古典文学大系）

長明は、自分の極限まで切り詰めた草庵生活を支えたものは、顔回、原憲の生き方であったと述べている。

しかし、顔回と原憲を日本の遁世者の理想像として位置付けることは、はたして適当と言えるであろうか。

顔回と原憲の清貧は、自己の現実生活の肯定と、天命あるいは時命への随順であった。しかし、仏教の世界においては、それは不徹底なものと言わざるを得ないであろう。伊藤博之氏は、中世における隱遁について次のように述べている。

中世的隱遁の根柢は、後の世であつたために、隠れた

り遁れたりする隱遁はもはや成立せず、ただひたすら世を捨てて生きることではしかなかった。そこでは閑居の世界に安住することすら妄執として否定されねばならなかった。

このように、中世的遁世は、穢土を厭離することであつて、余執を断ち切つて心を澄ます必要があつた。その意味で許由の徹底的な「捨」の精神は、中世の遁世者にとって理想的な生活態度であつたと言えるであろう。

第十八段について、安良岡康作氏「徒然草全注釈」（角川書店、一九六七—一九六八）が、「許由の生活ぶりが詳細に描き出され、孫晨のことは添えて叙せられた形である」「この段の主題は、許由の無一物境に対する感嘆にあると考えるほかはない」と述べているように、この章段では許由に比重がある。「徒然草」では、孫晨を許由と並べることで、許由の「捨」を引き立てる役割をさせていると考えられる。したがって、孫晨は許由を賛美するための比較の対象に過ぎないと考えてもよいであろう。

「徒然草」には、もろもろの俗縁を放下して、直ちに仏道修行の生活に入るべき主張がしばしば見られる。例えば、第五十八段に、

心は縁に引かれて移る物なれば、閑かならでは、道は行じがたし。

とあり、心が縁に影響されて変化するので、周囲が閑静でな

くは、仏道を修行するのは難しいと述べている。また、第七十五段に、

いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ。「生活、人事、伎能、学問等の諸縁をやめよ」とこそ、摩訶止観にも侍めれ。

と「摩訶止観」を引用して、まだ仏道を悟っていないくても、諸縁放下し、心を安楽にすることこそ、一時的にせよ、楽しむと言ふことができようと述べている。さらに、第二百四十一段に、

直に万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑也。

と、諸縁放下によって獲得した心身平穩の境地を説いている。兼好は許由の故事を通して、あらゆるものを捨てて仏道を行うべきことを主張したのだと考えるのである。

おわりに

以上、第十八段に描かれる許由と孫農の故事を中心に考察した。第十八段で、許由と孫農を一对に挙げたことは、一つには、顔回、原憲を対にした「和漢朗詠集」所収橘直幹の詩句の影響が考えられる。また、この第十八段の発想には、許由と顔回の中世的な描かれ方が影響を与えたものと考えられ

る。それは用捨についての態度であり、その両者の対照の妙を第十八段にうかがうことができるであろう。したがって、「蒙求」の故事を、再構成し新たな意味を付与した点が、「徒然草」第十八段の特徴であると言えるのではないだろうか。

第十八段は、許由の故事を孫農の故事と併記することで、許由の「捨」の精神を引き立てて描き、遁世者の理想的な生き方として示した。つまり、許由の故事を通して、あらゆるものを捨てて仏道修行を行うべきことを主張した章段であると考えるのである。

注

(1) 許由と孫農に関しては、島内裕子氏も、「二人の故事がひとまとめにして示されている書物は、徒然草以外に見えぬので、兼好が自分の読書体験の中から、独自にこれらの二人をひとまとめにして挙げたとすれば、単に書物に書いてあることを引き写しにしているのではなく、自分自身の問題意識によって類似したものを再構成しているわけで、文学的な手腕が発揮されていると言えよう。」と述べている〔徒然草の内景 若さと成熟の精神形成〕
「8、古典脱却への模索 1、中国の賢者」放送大学教育振興会、一九九四年。

(2) 早川光三郎「蒙求解説」〔新釈漢文大系「蒙求」上、明治書院、一九六三年〕

(3) 早川光三郎(注2) 前掲書

(4) 早川光三郎(注2) 前掲書

(5) 例えば、「本朝文粹」卷五所収菅三品の「為_レ小_一条左大臣_一「辞_二右大臣_一第三表」には、「伏惟、陛下初繼_二聖體_一、新守_二明文_一。竜虎爪牙之群、或前或後、鸞鶴羽翼之類、自_レ西自_レ東。宛山掛_レ飄。衣_レ霞之客入仕、」(新日本古典文学大系)とある。また、「東関紀行」にも、「許由が潁水の月に住みし、おのづから「瓢の器ものをかけたなりといへり。」(新編日本古典文学全集)とある。さらに、「太平記」にも用例を見出すことができる(本論第三節に引用する)。

(6) 「東関紀行」は宇津の山で出会った修行僧の生活ぶりを描写する際、「許由一瓢」の故事に言及し、宇津の山の修行僧の生活ぶりは許由よりも簡素だと述べている(注(5))。

(7) 「方丈記」の諸本は、広本と略本とに分けられているが、この部分に関しては、略本(長享本・延徳本・真字本)には見えるが、広本には見えない。

(8) 伊藤博之「中国の隠逸と日本の隠遁」(富倉徳次郎・貴志正造「方丈記 徒然草」角川書店、一九七五年)

※「徒然草」本文の引用は、新日本古典文学大系「方丈記 徒然草」(岩波書店)によった。

(しゃ・りつぐん 本学外国人客員研究員)